慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	矢島明希子君博士号学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2018
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.3 (2018. 2) ,p.195(419)- 202(426)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20180200-0195

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

矢島明希子君博士号学位請求論文審査要旨

論文題目

「中国古代の動物観をめぐる研究
——鳥のイメージから見る古代の環境と心性」

本学位請求論文は、中国古代における動物観、すなわち特定の動物が当時いかに観念され、いかなる機能を付与されていたかという問題を追求し、中国古代人の心性の一端に迫ろうとしたものである。中国古代の動物観というテーマをめぐっては、従来動物の具体的種類の同定に終始する名物学的な考証が中心を占めてきた。これに対し本論文は、そうした基礎的研究の成果をしっかりと踏まえつつ、特定の動物に投影された古代人の思考のあり方を検討することによって、中国古代文化史研究に寄与しようとする大胆な試みである。また研究にあたって文献史料を博捜するだけではなく、青銅器・画像石などの考古学的な遺物に対する目配りも忘れていないことは特筆に値する。このようにして織りなされた本論文の構成は以下のとおりである。

序章
（一）中国の伝統的学問における動物の識別
（二）動物と精神文化
（三）総合的研究
（四）各章の位置づけ

第一章　中国古代における悪鳥観
はじめに
（一）ふくろうのイメージ
（二）鳴き声のイメージ
（三）文字文化の普及とイメージの固定化
（四）ふくろうに対する嫌悪感の違いと環境
おわりに

第二章　漢代画像石に見るふくろうの表象
はじめに
（一）先行研究と古代のふくろう
（二）漢代画像石に見るふくろう像
（三）ふくろう像の地域的特徴と変化
おわりに

第三章　中国古代の鴟夷
はじめに
（一）事例と先行研究
（二）各事例から見る「鴟夷」の機能
（三）媒介としての獣皮とふくろう
おわりに

第四章　中国古代における鳩の表象
はじめに
（一）鳩とは
（二）鳩杖について

（三）季節・陰陽に基づく鳥獣の性格づけ
おわりに
第五章　中国古代における鳥の声と社会
はじめに
（一）倉庚のイメージ
（二）鳴き声の作用
（三）鳴き声の解釈
おわりに
結

各章の概要

序章は第一章から第五章で検討される事項に関する先行研究を紹介・検討したものである。まず著者は、伝統的な中国の学問体系の中で、主として動物を扱ってきた分野として名物学・訓詁学の二つの領域を挙げる。そしてこれらの分野が、先行する文献の中に登場する動物の記載を集積したものであることをその本質としていることを指摘し、それがリンネ流の西洋の分類学とは明確に一線を画していることを強調する。つまりそれらの記載は必ずしも自然界の客観的な観察によってなされたものとは言えないのである。こうした限界を有する名物学・訓詁学の成果に対し、現代の生物学的な学名を当てはめることには一定の限界があり、本論中で示された学名もあくまで参考にすぎないことを著者は断っている。続いて第二章に登場する鳳凰についての先行研究が紹介される。鳳凰に関しては、主として以下の三方面から研究が進められてきた。すなわち①原型論、②トーテム論、③瑞祥形成論の三つである。原型論はその名前の通り、鳳凰の原型をいかなる鳥に求めるかという議論である。これについては時代・地域が異なれば、違った鳳凰像が求められるのではないか、と著者は推測している。トーテム論は、鳳凰を特定の種族のトーテム獣とみなす議論であるが、トーテムの定義を厳密に絞り込んだ場合、中国古代にトーテミズムの概念をそのまま適応するのは無理であるとする。最後の瑞祥形成論は、漢代以降の歴史書に鳳凰がめでたい鳥として表れることをめぐる議論である。これについては、在地社会に伝承された様々な妖怪たちが政治的に編成されてゆく過程で、鳳凰の瑞鳥化が起こったとしている。次に著者は図像解釈の問題を取り上げる。これについては、たとえば漢代の画像石の解釈にあたって、特定の画像を単独で抽出するのではなく、その画像が描かれた空間的な配置を考慮すべきであるとする小南一郎の指摘を著者は支持し、そうした視点から画像石の検討を進めることを予告する。そして序章の結びとして、本論文の目的を、動物、とくに鳥類に対するイメージが時代・地域によっていかに変化してきたかを探求し、その伝達がいかなる形態で行われたかを究明することにある、としている。

続く第一章は、ふくろうが「悪鳥」とされた事情について考察を加えたものである。例えば『太平御覧』が「悪鳥」という項目を設定し、そこにふくろうの記載をあてたことに端的に示されているように、中国古代においてふくろうは「悪鳥」と認

識されていた。この点については従来の学説史上でも周知の事実であったが、いつ頃から、そして何故にふくろうが「悪鳥」とされたのかということは、必ずしも明白ではなかった。著者はふくろうにマイナスのイメージを与えたのは、その鳴き声であったという仮説を提示する。夜行性のふくろうはその鳴き声だけが闇夜に響き渡る怪異な存在であり、そうしたことからふくろうの「悪鳥」観が次第に形成されていったとする。しかし新石器時代や殷代の考古資料を一瞥すると、歴史の原初期にあってふくろうは、必ずしも「悪鳥」視されていたわけではない。むしろそれは正と負の両義的なイメージを付与されていた。それが戦国時代以降、文字文化が普及するにつれ、ふくろうのマイナスイメージが急激に増殖する。なぜなら春秋時代以前の「声の文化」のなかでは両義的な性格を持っていたふくろうも、文字という、世界を峻別し、秩序化するコードが導入されることによって、その聖性を剥奪され、「悪鳥」として一面的に認識されるようになっていったと考えられるからである。さらに著者はふくろうの「悪鳥」化について、環境史の観点からの仮説を提示する。唐代の『嶺表録異』のなかに、中国の北方ではふくろうを怪となし、南方では益獣とする、という記載がみえる。北中国は戦国時代以降の大規模な開発によって森林が大幅に減少し、ふくろうの生息する地域はせばめられてしまった。それによってふくろうに対する親近感も喪失の度を加えたが、いまだに豊かな森林の残存する南方の中国では、ふくろうは人々にとって歓迎される益獣であり続けた。自然環境の変化がふくろうに対する観念を変化させた可能性を強調し、著者は第一章の幕を閉じている。

第二章は漢代の画像石に見えるふくろう像について分析するとともに、その他の関連する問題に広く検討をくわえたものである。著者はまず、漢代の画像石に登場するふくろう像を、楼閣拝礼図上のものと、鳳凰に推しいだかれるものの二つのタイプに分類する。第一章ではふくろうのマイナスイメージについて検討したが、画像石のふくろうはいずれの場合においても、負の意味づけを付与されているわけではない。先学の研究にしたがえば、楼閣拝礼図は祖先祭祀にあたって使者に拝礼する子孫の姿を現したものであり、そこに描かれたふくろうは、死後の世界が安寧であることを祈願したものであろう。また鳳凰がふくろうを推しいだく図像は、墓室の後室に配置されることがある。後室の画像が死者の昇仙をあらわしたものだとする先行研究をかんがみれば、ふくろうもまた天界への飛翔に関連していたことが推測される。端的に言って、死者を速やかに死後の世界に導くことが、ふくろうに期待された役割であったと考えられるのである。続いて著者は画像上のふくろうが、いずれも正面形をとりながら、目をデフォルメされていることに注目する。ふくろうは、目の力によって、信仰されたのではあるまいか。このような仮説を提示したあと、著者は画像石の分布する地域に着目する。ふくろうを描いた画像石の分布は、安徽・山東・江蘇の三省に集中しており、これは春秋時代の魯・衛・宋の領域にほぼ重なる。これら三つの国は、殷の遺民の居住地で

あった。そして殷代は、青銅器の図柄や文様に明らかなように、ふくろうに対する崇拝が広範に支持されていた。これはおそらく偶然ではない。そもそも東夷の地域には鳥崇拝が行われていたと考えられている。この鳥崇拝をベースにし、そこに殷代のふくろう信仰が重層し、それが漢代にまで伝わったのが、画像石にみえるふくろうである。また森林の破壊が激しかった北中国のなかで、宋は自然環境が相対的に温存された地域であったとされている。森林の残存という環境史的な事実も、この地域にふくろう崇拝が残された理由の一つであろうというのが著者の仮説である。また森林の残存という視点から考えると、墓地に広く樹木が配されていたことが注目されるべきであり、いわゆる墓地林の存在が、ふくろうと死者を結びつける契機の一つになったであろうとの推測を、著者はくだしている。このような考察を展開したうえで著者は、『漢書』にみえる「春に祭祀を行ない、ふくろうを用いる」という記載を取り上げ、ここに登場するふくろうは犠牲であり、ふくろうは犠牲に捧げられることによって凶悪な災害をはらう力が期待されたと述べる。

第三章は、先秦から漢代の文献に登場する「鴟夷」（ふくろうの皮）について検討をくわえたものである。「鴟夷」はおおよそ以下の三つの文脈にそって語られる。まず第一は、宋の康王が、「鴟夷」に血を盛り、これを臺にかけて下から弓で射たというもの。第二は、罪人の管仲が、魯から斉へ護送されるにあたって「鴟夷」に包まれたというもの。第三は、自殺した伍子胥の死体を「鴟夷」に包んで長江に投じたというものである。これらの伝承はそれぞれ、宋・斉・呉といった国を舞台にしており、中国の東方地域に伝えられてきたものといえる。さて第一の物語は、本来は季節祭で行われていた行事であると推察できる。射礼は犠牲の射殺がその本義であり、「鴟夷」に弓を射かけることは犠牲の血によって穢れをはらうことを意味していたのではないだろうか。また管仲は「鴟夷」に包まれることによって、罪人から臣下へと劇的な身分の転換を経験しており、それは犠牲による媒介といった機能を想起させる。最後に伍子胥の「鴟夷」は、古典のなかで比干が心臓をさかれた故事と対になってしばしば記載されていることが注目される。先学の研究によれば身体の解体は人身供犠の連想をともない、ここから伍子胥の場合も、同様の解釈を導くことが首肯されよう。人身供犠が神と人との媒介であるならば、伍子胥は「鴟夷」に包まれることによって、この世から川の中への越境を果たし、また人から神への跳躍をとげるのである。「鴟夷」をめぐるこうした宗教的観念の背後には、プロップの指摘する、「獣皮による渡り」という考え方が横たわっている。獣の皮を身にまとうことは、異なる世界へと越境する際の有効な手段たりえたのである。端的に言って皮袋はあちらとこちらを連結する媒介に他ならないと言えよう。こうした獣皮一般が持つ機能に、ふくろうの持つ犠牲としての意味合いが添加された時点で、「鴟夷」にまつわる観念が形成されたと考えられる。最後に著者は、こうした伝承が中国の東方地域で伝承されてきた背景には、この地が濃厚な鳥崇拝の伝統を残してきたからだとの推測を提出し、

本章を締めくくっている。

第四章は、中国古代において鳩がいかに観念されてきたか、という問題をあつかったものである。中国最古の古典である『詩経』には鳩の登場する詩篇が数例散見されるが、そこにみえる鳩は、女性・婚姻・桑摘みの象徴としての役割を果たしている。桑摘みは春の仕事であり、かつ桑畑は男女が歌垣を行う場所であった。こうした事実を踏まえたうえで、著者は漢代以降の文献にその存在が確認される鳩杖に言及する。鳩杖とは一定の年齢に達した老人に国家が支給する、一種の身分標識であった。それでは何故老人に鳩の飾りのついた杖を与えるのであろうか。これについて従来十分な検討がなされてこなかったのは遺憾である。それはもしかしたら既存の文献が、鳩はむせばないため、老人にもそうなってもらいたいからである、と解説するのをそのまま鵜呑みにした結果であるかもしれない。しかしこうした解釈が正しいという保証はどこにもない。むしろ著者は、陰陽二元論のなかで、老人が陰に属する存在、あるいは陰が過剰な存在とされたことに注目する。これを季節に移しかえれば秋・冬は陰、春・夏は陽ということになる。ここで月令の記載に目を転じると、鳩は春の桑摘みの時期を告げ知らせる鳥とされていたことが判明する。桑摘みの仕事は主に女性によって担われており、ここにおいて、先に述べた女性・婚姻・桑摘みという象徴体系は完結する。こうした象徴体系の指し示すところはただ一つ、万物を活性化させる根源、という点に煎じ詰められよう。鳩は渡り鳥ではないが、少なくとも経学の上にあっては、鳩が春の鳥の代表とみなされたのも、このように考えてくると怪しむに足りないであろう。つまり陰に属する老人の気を、陽の鳥である鳩によって補完しようという意図が、老人に支給する杖に鳩のしるしをつけた背後に存在した思考様式だったのではあるまいか。こうした考え方は後代にまで受け継がれた。『本草綱目』には、「五月五日に鳩の骨を身につけると夫婦仲が良くなる」という記載が残されている。五月五日は陽気がもっとも盛んになる時であり、その時間を選んで鳩を身におびると夫婦が睦まじくなるというのは、古代中国における陽鳥としての鳩のイメージが見事に揺曳していると著者は指摘し、本章の幕を閉じている。

第五章は、中国古代において鳥の鳴き声の果たしていた役割を、倉庚を中心に据えながら論じたものである。著者は第四章で、鳩の表象について考察を加えてきた。そこにおいては鳩が春を代表する鳥として、中国の古代人に認識されていたことが明らかになった。同じく春の物候として、文献上にしばしば登場するものに、倉庚がある。著者は『詩経』に描かれた倉庚には春と婚姻のイメージが託されているという先行研究を踏まえながら、倉庚にそのようなイメージが付与されたのは、何よりもその鳴き声に原因があったと論じる。倉庚の鳴き声は季節の正しい循環と、春の到来による農事の始まりを告げるものであった。そしてこうした農事の開始を知らせる鳥は、倉庚以外にもいくつかの種類があったことを確認する。そのうえで著者は、こうした鳥の鳴き声を、サウンドスケープ（音景）という概念

で読み解くことを提唱する。この概念を提起したマリー・シェイファーは、音の風景を基調音・信号音・標識音の三種に区別したが、著者によると春の到来を知らせる鳥の声は、基調音に属する。倉庚をはじめとする、春鳴く鳥の声のなかに、人々は季節の新たな到来を知らせる、確かなメッセージを聞き取っていたのである。こうした点を踏まえながら、著者はさらに中国の古代において、鳥の声の果たしていた役割について考察する。中国古代の人々が鳥の声の中に聞き取ったのは、一つには物事の予兆・予言である。これは『左伝』に例があり、春秋時代にはすでにその事例が確認される。当時は鳥の声を聞き分け、これを解釈するのはシャーマンのような特殊な職能者であった。また当時が圧倒的に声の優位な社会であったことも考慮にいれねばならない。ところが時代が下るにつれて、一般の人間も鳥の声の中に予兆を聞き取るようになってゆく。こうした背景には、戦国時代以降に見られた、人間が中心に位置する社会への移行と、専門的な知識がより広い階層に普及してゆくという現象が横たわっているのであろう。もう一つはすでに論じた倉庚などの「時の声」である。これは月令・歳時記・農書といった実用書に多く記載されていることからもわかるように、一年の正常な循環を人々に確認させるものであった。このような「鳥の声」の豊穣な世界に注目すべきことを提言し、著者は本章を締めくくっている。

審査要旨

そもそも中国古代史の研究にあっては、従来政治・経済・法制史の分野に力点が置かれ、文化史の研究は相対的に軽視される傾向にあった。なかでも動物観の研究は、種の同定をめぐる作業をのぞけば、ほぼ未開拓の荒野であったと言える。こうした前人未到の領域に鋤を入れた著者の姿勢は、まず高く評価されるべきであろう。また動物観の研究について、著者はその対象を鳥類に限定し、第一章から三章までで鳧ろうを、第四章で鳩を、第五章で倉庚を中心とする季節の物候を俎上に載せている。鳧ろうについて先行研究は、新石器時代から殷代におよぶ鳧ろう信仰について言及するとともに、そうした神聖な存在が時代のくだるにつれて、文献上で「悪鳥」としてマイナスの価値を付与されてゆく事実を明らかにしてきた。それに対し著者は、鳧ろうの悪鳥観をもたらした原因を探求し、その一つが鳧ろうの鳴き声にあったことを指摘する。それと同時に、漢代の墓室装飾である画像石に描かれた鳧ろうに注目し、それが文献史料とは異なって、プラスのイメージを帯びていたことを明らかにしている。この点は著者の功績である。また著者はこうした分析に地域性をからめ、画像史料の残る地域が殷の故地であったことを述べるとともに、環境史の視点から、鳧ろう画像石の分布する地域が、森林の豊富に残された地域であったことを指摘している。いずれも従来みられなかった新知見である。特に環境史は中国古代史にあっては、新しい研究分野であり、その作業に従事する研究者もいまだ数名に足りず、

今までに上梓されてきた関連の書物も二・三冊を数えるにすぎない。こうした斬新な領域の方法論をいち早く論文に取り入れた著者の姿勢は高く評価されよう。しかし問題がないわけではない。すなわち殷の故地という地域性と、環境史のアプローチが、必ずしも有機的に結合しない恨みが残るのである。つまり殷の故地であったことと、森林が残された地域が重なる歴史的な必然性が存在しないのである。この点については再検討の余地が残されていると言えよう。またふくろうが「悪鳥」とみなされた理由について、戦国時代以降に文字文化が普及するにつれ、事物一般についてその神秘性が剥奪された点に原因を求めているのも、必ずしも万人を首肯させえぬ恨みなしとしない。文字文化の普及が神秘性の剥奪に直結していたとするならば、現在に残された古典の記載は合理性の一点で首尾一貫していなければならない。言葉をかえるなら、『山海経』のような怪力乱神の書物が残された理由が説明できないのである。このように行論に未熟な点も残っているが、第一・二章において、ふくろうの「悪鳥」化の原因と、漢代における正負両イメージの併存を明らかにした意義は大きい。今後この道を歩む研究者が継承すべき、貴重な研究成果であろう。また鴟夷（ふくろうの皮）をめぐる伝承を扱った第三章は、先駆的な指摘に満ちている。まず動物の毛皮一般が、それに包まれた者の精神的・物理的な「越境」を可能にするという指摘は斬新である。そうした古代の信仰をベースにしながら、そこにふくろうの皮が持つ犠牲としての特性が加わった瞬間に、鴟夷にまつわる射天あるいは管仲・伍子胥の物語が生成されたという推測には充分な説得力がある。「獣皮による渡り」という概念は、ロシアの民話学者プロップの指摘を援用したものであるが、中国古代史研究にロシアの学界の研究が持ち込まれることは従来決して頻繁ではなかった。著者の研究はロシア人の研究成果を利用した点で注目されるばかりではなく、それによって従来謎とされてきた鴟夷の機能を立体的に明らかにし、さらに一歩進んでそこにふくろう信仰の残像を読み取っている点で画期的である。ただし問題がないわけではない。ふくろうの越境性を犠牲の越境性から説く著者の主張は必然的に、犠牲獣としてのふくろうを策定する。言うまでもなく著者は周到に、ふくろうが犠牲として供された事例を文献から丹念にひろっているが、それは古典籍に残されたふくろうの豊富な記載に反比例して、量的に圧倒的に少ないのである。あるいは殷代青銅器に造形された動物紋様は、祭祀の場にあって犠牲に供された動物を表現しているという張光直の見解に従うならば、殷代のふくろう型青銅器をその傍証として挙げることも可能かもしれない。しかしそうした作業によっても、ふくろうの犠牲獣としての性格は、いまだ強力に実証されたとは言えない。今後の課題として残された問題であると言えよう。続いて中国古代における鳩の表象についてであるが、これについては女性・婚姻・桑摘みといった鳩をめぐるイメージを明確に摘出した点が斬新である。さらにそうしたイメージを踏まえながら、鳩には陰陽二元論において、陽に属する特性が付与されたことを指摘し、漢代以降の文献にみえる鳩杖

の意味について全く新たな視点から解釈した点が注目されよう。鳩杖はその豊富な考古学的な出土例と、王杖十簡の有名な記載から、つとに知られた文物であったが、老人に支給する杖に、なぜ鳩の飾りが装着されたのかという謎について、従来明確な回答が与えられてこなかったのは、まことに不思議な事態であった。これに対して著者は、老人が陰の存在とされたことを丹念に考証し、老人の陰気に陽気を補強するために、陽鳥としての鳩が利用されたと説いた。説得力のある見解である。最終章である第五章で、著者は倉庚をはじめとする、新たな季節の到来を告げる鳥の鳴き声にメスを入れ、サウンド・スケープという概念でこれを説明するとともに、鳥の声に予言・予兆を聞き取った古代の人々の心性についても注目している。第五章は明確な論証にやや欠くところがあり、問題提起を前面に押し出した論文であるが、中国古代史研究に「聴覚」を中心とした「感性の歴史」の導入を宣言した点は、新鮮な指摘といえよう。以上の全五章を通じて著者のめざした目標は首尾一貫している。それは中国古代人が鳥類というおのれの外界に存在する事物を通して、何を、どのように感じていたかという精神史の地平を切り開くことである。すでに指摘してきたように著者の論証には、あるいは十全な説得力が備わっていない場合もあり、あるいは行論の過程に不備のみられる個所も散見される。しかし中国古代史研究における精神史の探求は、いまだ初発の段階にあり、そこに確かな足跡を残した著者の研究の意義は決して小さなものとは言えないであろう。そこに示された新たな知見の数々は、中国古代文化史の道程を行くものに、確かな道しるべとなりうることは疑いをいれない。以上により審査員一同は、本論文が博士（史学）にふさわしい成果であると判断する。

主査　慶應義塾大学文学部教授　桐本　東太
副査　名古屋大学大学院人文学部教授　櫻井　龍彦
副査　東海大学文学部特任教授　齋藤　道子